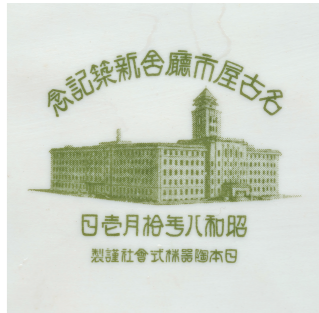


名古屋市役所本庁舎新築と 記念煙草セット



リニューアルレポート 1

津田 卓子

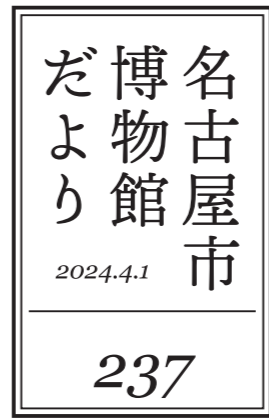
今号から休館中の活動やリニューアル工事の進捗を、連載でお届けします。まずはリニューアル前の最終開館日、令和5年（2023）9月30日（土）に実施した休館セレモニーの様子からご紹介しましょう。

すでに特別展「水木しげるの百鬼夜行展」の会期が終了していたため、ひっそりとさびしく休館を迎えることになってしまいました。は…という私たちの心配とは裏腹に、当日はなんと350名の方たちが来場してくださいました。気がつけば、1階エントランスの階段上までぎっしり。午後4時過ぎに始まった式典は、名古屋市立大学の学生がまとめた「博物館のこれまでとこれから」の上映、館内や公式ウェブサイトを通じて募った博物館の「思い出メッセージ」紹介（公式ウェブサイトで公開中）、そしてロダンの「考える人」出発式といったプログラムで進行していきました。

（次ページへ）



写真1 休館に入る博物館



とりわけ歴代特別展入場者数ランキングの反応が大きく、ベスト3の発表では会場からどよめきが起こり、当時の思い出を語る姿があちこちで見られました。その後は前庭での名古屋市消防団による放水アトラクション。空高く弧を描く放水でリニューアル工事の安全を祈願しました。

そうこうしているうちに閉館時刻が訪れます。小林史郎館長の号令によって正面玄関のシャッターがゆっくりと降りていくなか、整列した職員一同が一礼し、セレモニーは終了。ご来場いただいたお客様から「さびしいわ」とお声掛けいただき、46年ものあゆみを経て、博物館が市民の皆さんに親しまれる存在になっていくことを実感したのでした。

特別展入場者ランキング	
ベスト1 「大英博物館 永遠の美と生命 古代エジプト展」	2000年…205,915人
ベスト2 「中華人民共和国出土文物展（開館記念展）」	1977年…186,017人
ベスト3 「スヌーピーミュージアム展」	2019年…177,487人

考える人、出張中

休館セレモニーにも立ち会ったロダン「考える人」は、10月27日（金）に梱包したあと、岩手県にある陸前高田市立博物館へ輸送され、無事にロビーへ収まりました。東日本震災で被災した同館は、令和4年（2022）11月5日（土）に新しくオープンした地域の歴史博物館です。「考える人」の除幕式が行われたのは、再開館からほぼ1年後にあたる11月3日（金・祝）。陸前高田市の皆さん、しばらくの間、どうぞよろしくお願ひいたします。



写真2 「考える人」陸前高田市立博物館展示風景

東館（仮称）完成

令和6年（2024）1月31日（水）、地上3階建、鉄骨造の東館（仮称）が完成しました。資料を安全にそして速やかに納めるため、この施設には様々な工夫がこらされています。たとえば壁・床部材の一部に、セメント等を成型した状態で納品される軽量気泡コンクリートパネル（ALC）を採用したのは、文化財に悪影響を与えるアンモニアの発生を抑えるためです。そのほか特筆したいのは収蔵庫内に使用される木材のこと。収蔵庫の内装材として長年多用されてきた木材ですが、金属性顔料を変色させる有機酸を放出することが、近年分かってきました。そのため内装には、不燃かつ調湿機能を備える無機質系ボードを貼ることにしたのですが、どうしても木材が必要な部分が出てきます。今回、この部分には、有機酸が出ていく熊本県産の小国杉（おぐに杉）を使用しました。それも原木から柁目（まさめ）で節の少ない部位を切り出したうえ、節からは有機酸が出やすい）、安定した湿度環境を保つために含水率13%以下になるよう、十分に乾燥させたものです。このように入念な注意を払ってようやく完成。これから半年ほどかけて全資料の引っ越しをしていきます。その様子は次号にて。



写真3 東館（仮称）外観



写真4 東館（仮称）床部材（ALC）



写真5 東館（仮称）収蔵庫内装

山本梅逸（1783～1856）は地元名古屋ではもとより、京都・江戸でも高い評価を受け、江戸時代後期を代表する南画家の一人である。花鳥画の名手として特に有名であるが、山水画にもすぐれた作品を残しており、日本の風景を描きたいいわゆる「真景図」の作例も多い。今回紹介する資料もそのひとつで、近畿地方から瀬戸内海沿岸の名勝を描いた画稿である。各図は見開きの左右二ページが区隔で二つに分割されており、版下原稿だと考えられる。出版された形跡はないが、名古屋で出版された別の著者の紀行文の挿絵に類図があり、関係がうかがわれる。制作年は梅逸が21歳の享和3年（1803）、彼の作品の中でもっとも早い時期のものである。明治時代の名古屋の画家、織田杏齋の所蔵品として知られ、そのご子孫からご寄贈いただいたものである。

山本梅逸は幼少期よりパトロンで理論的な指導者でもあった富商、神谷天遊の庇護を受けていたがその没後、享和2年（1802）年と同じく天遊の援助を受けていた中林竹洞に誘われて上京。しかし、京都では芽が出ず、翌享和3年8月竹洞の父の逝去に伴い名古屋に戻っている。この冊子の取材をした旅行は、上京中のことか、帰郷する際に先を急ぐ竹洞と別れ、梅逸が別行動をとったものかはわからない。巻末に「享和三年歳在癸亥冬十月 尾張春園」とあり（春園は梅逸の初号）、成立は帰郷後であることは間違いのないようである。

山本梅逸筆 「西国名所 真景図帖」 山田伸彦



第19図 高雄山（京都府京都市）

表題はなく、名称は受贈の際に付けたものである。奥付に旧蔵者らしい「鶯風齋」なる人物の名があるが詳細は不明で、杏齋以前の伝来はわからない。描かれた風景画は21図。第19図の高雄山図のみ着色。他は墨画。各丁の順番に入れ替わりはなく、欠落した丁もないようだが、構成として、まず滋賀県大津市の瀬田川河口周辺から始まってから兵庫県神戸市の生田社へとつぎ、山口県岩国市の錦帯橋までの海路を順にたどった後、また琵琶湖周辺に大きく戻るといふように地理的な順序に脈絡がなく、完成原稿であるかどうかは疑わしい。

敵島神社や錦帯橋といった名所も、その特徴を誇張することなく、ありのままに写されている。現地調査したところ、錦帯橋については橋の向こう側に描かれた山の稜線も正確なものであった。ただし、遠景を中心に描く際は水平線・地平線を画面中央に引く傾向が見られ、近景を描く場合でも実際の作者の視点よりは高い位置から見おろすようになっている。宮島・錦帯橋については現地を調査したところ、これらの図のように風景を見下ろすことのできる高台はなかった。梅逸は西洋画の遠近法を学んではおらず、奥行き表現にどうしても伝統的な鳥瞰図の視点を取り入れざるを得なかったのであろう。質感の描出も伝統的な中国画の技法によっている。山の多くは米点という点描によって構成され、崖の岩肌には斧壁皴（きりかき）というヒダに点描を施している。高雄山の紅葉も記号的なものである。

（次ページへ）

名古屋市役所 本庁舎新築と 記念煙草セット

小西 恒典

「帝冠様式」の名古屋市役所本庁舎

現在の名古屋市役所本庁舎は、明治22年(1889)に名古屋市が誕生して以来、3代目の建物となる。昭和3年(1928)に行われた昭和天皇の御大典記念事業として、その建設が計画された。昭和6年(1931)に着工し、昭和8年(1933)9月6日に竣工した。鉄骨鉄筋コンクリート造で地上5階・地下1階建てである。

建物の外観を特徴づけるのは、西側正面の中央に備えられた高い塔屋である。その頂部には銅瓦葺きの二重屋根が架けられ、計9体の鯨が載せられている。これは市役所から直線距離で約800メートル西方にある、名古屋城大天守の屋根を強く意識したものである。高層建築が少なかった当時は、両者が同時に視野に入ることもあり、景観の調和も考慮されたはずである。5階の上のバラベット(屋上



写真2　名古屋市庁舎新築記念煙草セット　1組　昭和8年(1933)　日本陶器株式会社製造　藤木幸尾氏寄贈



写真1　完成から4年後の名古屋市役所本庁舎「名古屋汎太平洋平和博覧会絵葉書」より　昭和12年(1937)　当館蔵

の低い手すり状の部分)は黄土色の瓦葺きで、建物全体を和風に見せている(写真1)。

洋風のビルディングに和風の屋根を載せる建築は、のちに「帝冠様式」と呼ばれた。この様式は昭和初期に流行し、特に役所などの公共建築にとり入れられた。ほかに代表的な建物としては、神奈川県庁舎、旧軍人会館(現・九段会館テラス)、旧東京帝室博物館本館(現・東京国立博物館本館)などが挙げられる。

日本陶器製の市庁舎新築記念煙草セット

昭和8年(1933)10月1日、この庁舎の落成式が行われた。ここで紹介するのは式典の参加者、あるいは関係者に配られたと思われる、喫煙具のセットである(写真2)。写真2の左から煙草入れ、マッチ入れ、灰皿、その下のトレ

イの4点セットである。いずれも磁器製で、緑青色の地に白菊が描かれている。転写紙の技術を使って、ある程度の数が生産されたはずである。

トレイの底面には「名古屋市庁舎新築記念　昭和八年十月一日　日本陶器株式会社謹製」の文字と、庁舎の姿(おそらく完成予想図)の銘がある(写真3)。煙草入れと灰皿の底面には、「日本陶器会社　RC　NORITAKE NIPPON TOKIKAISHA」の銘が入れられている(写真4)。

これを製造したのは、日本陶器株式会社(現・ノリタケカンパニーリミテド)である。写真4のマークは、大正元年(1912)から昭和15年(1940)までに生産された、国内向け製品に入れられていたもので、ヤジロペー印と呼ばれる。中央の「不」に似た形のヤジロペーは、「バランスのとれた経営」をあらわしているという。また"RC"は"Royal Crockery"の略で、「高級食器」を意味している。

高級食器製造・販売による日本陶器会社の成長

同社の前身である日本陶器合名会社は、明治37年(1904)に現・名古屋市西区則武新町に設立された。白生地・硬質磁器の製造技術を確立し、米国などへ輸出するためのファンシーウェア(花瓶、磁器製の人形など)、洋食器(ディナーセット、コーヒーカップセットなど)の製造で業績を伸ばしていった。明治41年(1908)には国内向けの製造・販売も開始された。同社製の食器は白色度が高く、薄手であることが特徴であった。本社の所在地を由来とする

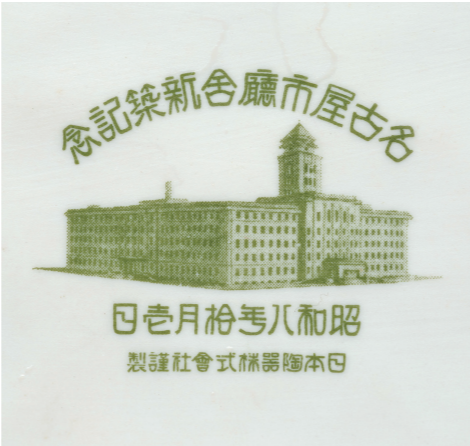


写真3　トレイの底面銘



写真4　灰皿の底面銘　トレイの銘より一回り小さい

ブランド「ノリタケ」は、世界市場でも注目を集めるまでに成長していった。日本陶器株式会社と改称したのは大正6年(1917)である。

昭和4年(1929)から始まった世界恐慌は、同社にも大きな影響を与えた。世界の有力国は自国の産業を保護するため、自由貿易から保護貿易に政策を転じた。その結果、各国が市場・原料供給地などを囲い込むブロック経済が形成された。

輸入品には高い関税がかけられたため、日本陶器会社は経営路線の転換に迫られた。その対策として打ち出されたのが、米国以外への輸出拡大、国内向けの磁器製和食器の製造であった。後者は昭和6年(1931)に開始され、底面には写真4に見られるヤジロペー印などが入れられた。名古屋市役所本庁舎が新築されたのは、このような情勢下であった。

建物にも喫煙具にも、「日本らしさ」が求められた時代

昭和13年(1938)、市役所の南隣に愛知県庁舎が完成した。これも帝冠様式で、東側を除く三方の屋上に、銅瓦葺きの城郭風屋根が載せられた。名古屋城大天守の屋根の形状を、市役所庁舎よりも強くとり入れたものである。この様式の大規模建築が2つ並ぶことで、名古屋には他都市にはない独特の景観が作り出された(写真5)。両庁舎はともに平成26年(2014)に、重要文化財に指定されている。

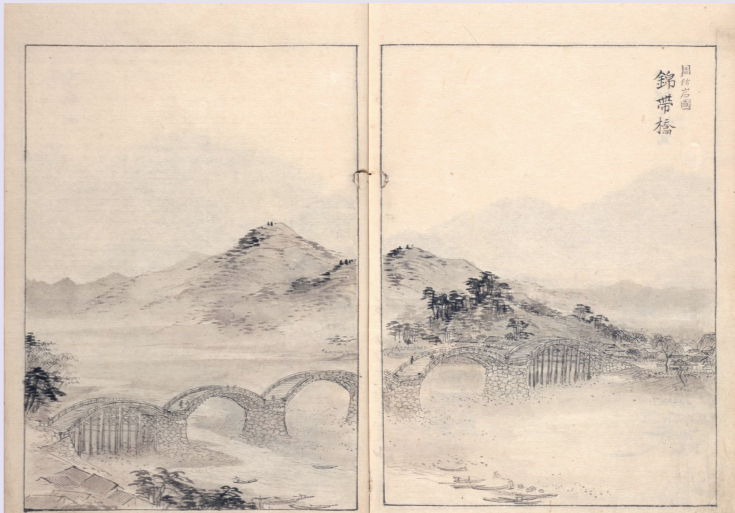
名古屋市役所本庁舎は、西洋の技術であるビルディングに、「日本らしさ」を取り入れようとする風潮の中で建てられた。その落成式の記念品として制作された煙草セットは、表面は菊花の文様で覆われ、日本風を意識している。一方で、洋食器メーカーらしい派手さも十分に残している。偶然の一致であろうが、この煙草セットも、西洋的な工業製品に「日本らしさ」を主張させようとする意匠であった。



写真5　名古屋市役所と愛知県庁絵葉書(部分)　昭和35年(1960)ごろ　個人蔵

江戸時代後期、日本人は旧来の名所絵に描かれた記号的な風景表現に飽きたらず、西洋的な遠近法を取入れた写実的な風景画を求めようになっていた。見たことのない中国の霊山や胸中丘壑(きょうちゆうきよく)とよばれる画家自らの精神世界を山水画のおもなモチーフとして描いていた南画家達も、実際に目にした日本の風景を作品とするようになった。それらは「真景図」と現在呼び習わされており、画家自身が意識的にその用語を用いたものとしては江戸中期の禅僧で書家・画家としても活動した佚山(1702〜1778)による、宝暦9年(1759)の『豊前国羅漢寺之真景』が現在知られる一番早い例である。ただしこれは、写実性はあまり意識されず、現代人にはイラストマップのように見える。梅逸以前には名古屋における南画の先駆者である丹羽嘉言も「神洲奇観図」と題して写実的な富士を描いた作品を、明和7年(1770)以降、何例か描いている。

南画の真景図の作例として本資料がやや異色であるのは、これが出版を意図した版下であることにある。あるいは、当時全国で続々と出版されていた名所図会の一変種としてとらえるべきかも知れない。



第18図　錦帯橋(山口県岩国市)



第12図　磐台寺(広島県福山市)

道中の風景の挿絵が多く入っている。図には絵師の落款がなく、誰の作品かはわからないが、このうち、「磐台寺」 「錦帯橋」の図が梅逸のものと同酷似している。梅逸の真景図帖には平七の行程から外れたところの図もあり、梅逸の旅が取材のためだったとは考えにくい(が、『筑紫紀行』の挿図のいくつかは梅逸自身が手がけたか、少なくとも本資料の図様を参照したものと考えられる。

本資料は昨年公開した「名古屋市博物館収蔵品データベース」において全図の画像を公開している。本データベース(https://www.b0.musechque.jp/nagoya_city_museum/)

名古屋博物館収蔵品データベースでは名古屋市博物館所蔵資料全件の資料名を挙げている。画像や解説については未掲載のものが多いが順次充実させてゆくのでご期待いただきたい。『筑紫紀行』は当館の所蔵本は画像未掲載であるが、当館も連携する予定のジャパンサーチなどの横断検索アーカイブで他館の所蔵品が閲覧できる。近年はアーカイブの連携が進み研究環境が変化したことを実感している。